様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００００８３

研究課題名（和文）フランス啓蒙における立法者問題：政治的自律の創設と社会･宗教･歴史

研究課題名（英文）The problem of Legislator in French Enlightenment : foundation of political autonomy in respect to society, religion and history

研究代表者
王寺　賢太（OHJI, Kenta）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：９０４０２８０９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題の成果は『消え去る立法者―フランス啓蒙における政治と歴史』（2023年3月）として刊行された。本書はモンテスキュー、ルソー、ディドロにおいて、法律とは、政治共同体が自己保存のために自己自身に再帰的に働きかける特権的回路であり、そのとき立法者はこの政治的自律の運動のなかに消え去るべき媒介者として位置づけられることを示す。ただし、モンテスキューやディドロがあくまで事実上の歴史過程のなかに立法者を位置づけたのに対し、ルソーは立法者を法案に対する人民の合意を取りつける権利上の存在として位置づけることによって、かえって法律に服従する人民を主権者とみなす理論的転倒を果たしたのであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、立法者論という独自の視角から、モンテスキュー、ルソー、ディドロの主要政治著作を一貫した展望の下に読解した点にある。とりわけ、前二者の関係は、あくまで現実の歴史過程のなかにあるべき政治的自律の回路の実現を見ようとするがゆえに、既存の政治的秩序を歴史主義的に肯定するモンテスキューから、その既存の政治秩序の手前で、「権利上」の政治的正統性の問いを立てることによって、既存の政治秩序を問題化するルソーへの移行として理解される。また、モンテスキュー、ルソー、ディドロのホッブズに対する関係に焦点を当てる点でも、本書は17世紀から18世紀への思想史上の転換を跡づける意義をもっている。

研究成果の概要（英文）：The outcome of this research project was published as "The Vanishing Legislator: politics and history in the French Enlightenment" (March 2023). This book shows that in Montesquieu, Rousseau and Diderot, law is a privileged circuit through which the political community recursively works on itself for the sake of self-preservation, and thatthe legislator is then positioned as a disappearing mediator within this movement of political autonomy. However, whereas Montesquieu and Diderot positioned the legislator within the de facto historical process, Rousseau, by positioning the legislator as an entity on the right to obtain the people's consent to legislation, instead fulfilled the theoretical fallacy of regarding the people who are subject to the law as sovereign.

研究分野：思想史

キーワード：モンテスキュー　ルソー　ディドロ　ホッブズ　立法者　法律　啓蒙　自律

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究開始の時点では、世界的に言って、フランス啓蒙政治思想の通史も、その政治思想史上の主要な登場人物である哲学者たちの政治思想の異同を体系的に検証する研究も存在しなかった。本研究代表者は、これまで西欧の研究者と緊密な協力関係を結びながら、レナル／ディドロの『両インド史』を中心に、もっぱら文献学的・コンテクスト主義的な手法で18世紀フランスの歴史叙述と政治思想について研究を進めてきたが、本研究ではむしろ、政治共同体の創設・再創設としての「立法」と、その際に要請される政治的行為者としての「立法者」の形象に焦点を当て、そこからモンテスキュー、ルソー、ディドロの哲学者に共通する政治哲学的問題設定を取り出し、その上で三者の異同を見きわめ、そこから18世紀フランス政治思想史の変遷を描き出すことを志した。

２．研究の目的

本研究で取り上げる「立法」論・「立法者」論とは、古代ギリシア以来の西欧政治思想市場で、政治共同体の創設を考える際に焦点となった議論である。この議論の中核には、政治共同体の創設を法律の創設と同一視することから生じるアポリアがある。法律は拘束力をそなえた命令でなければならないが、同時に、その命令に従う人民なしには法律は法律たりえない。法律の創設と政治共同体（人民）の創設を同一視する限り、両者の創設は行為遂行的に実現されるか、事後的に実現されたものとして確認されるほかない。18世紀フランスにおいて「立法者」の形象がとりわけ問題化されたのは、この政治共同体＝法律の創設を担う政治的行為者の介入が、一方では必然的に要請されるものとみなされながら、それが同時に、政治共同体（人民）が政治共同体自身に法を与える、という「政治的自律」の理想から絶えず逸脱し、専制や僭主政の危険を孕むものとみなされたからであった。

このような展望の下で、①モンテスキュー『法の精神』の法論（第一篇）・習俗論（第三篇）・法制史論（第六篇）を、「一般精神」論を中心に読み解くこと、②またそこから出発して『人間不平等起源論』の歴史批判以来、『政治経済論』の統治論、『ジュネーヴ草稿』・『社会契約論』における社会契約／協約・立法・統治・国制の維持に現れる「一般意志」論・主権論までのルソー政治思想の展開をモンテスキューの批判的継承の観点から読み解くこと、③さらにその際、『百科全書』期の項目「自然法」以来、ルソーとは異なる独自の一般意志論を展開し、一七七〇年代、モンテスキューを最大の参照項としながら、ロシア論と『両インド史』への寄稿のなかで「文明化」論を展開するディドロ政治思想の展開を、前二者との関係において位置づけること、そして以上の三点を通じて、モンテスキュー、ルソー、ディドロの「社会」観、「政治」観、「歴史」観の総体を捉え、フランス啓蒙期の政治思想史を「政治的自律」の理想とその実現の困難をめぐる考察の変遷を中心に描き出すことが本研究の目的であった。

３．研究の方法

本研究はとりわけ､取り上げる各哲学者の作品･テクストの読解そのものを何よりも重視する。そのことはすなわち、単なる理論的な体系の再構築を目指すのではなく、モンテスキュー、ルソー、ディドロといった各哲学者が政治についての自身の理論的考察をどのように書き記したか、またその際に、いかなる相互参照のネットワークが三者の間に張り巡らされているかに注視し、

このテクスチュアルな照応関係から、三者それぞれの政治思想の固有性と、三者のあいだの異同を描き出すことを意味する。この点で、本研究のとった方法論は徹底的に文献学的である。

しかし、本研究の過程では、とりわけモンテスキュー、ルソー、ディドロの三者にとって共通の参照項であり、最大の論敵でもあったホッブズの自然状態＝戦争状態論との論争的関係が浮上し、それとともに、本研究の視野は否応なく、17～18 世紀の自然法をめぐる哲学的議論の展開へ、さらには政治共同体そのものの存立条件をめぐる理論的な考察へと導かれることになった。この点、以下で挙げる研究成果においては、まだ考察は不十分であると考えているが、本研究によって得られた新たな方法論的考察の成果として、ここに記しておきたい。

４．研究成果

本研究の最大の成果は、2023 年 3 月に刊行された、王寺賢太『消え去る立法者―フランス啓蒙における政治と歴史』（名古屋大学出版会、532 頁、二段組）である。本書では、本研究の所期の目的であったモンテスキュー、ルソー、ディドロの三者を取り上げるフランス啓蒙の政治思想史の総体を、立法者論を通じて描き出すことを実現すべく試みた。その際、とりわけホッブズの自然状態＝戦争状態論との対決に焦点が当たることになったのも、本研究のもたらした大きな副産物である。本書は大部にわたるフランス啓蒙についての研究書として、学界内外に反響を獲得した。そのうちには、本科研費プロジェクト共催で 2023 年 10 月 22 日に京都大学人文科学研究所で開催された公開合評会がある。評者としては、森川輝一（京都大学公共政策大学院教授）・小泉義之（立命館大学先端総合学術研究科教授）・佐藤淳二（京都大学人文科学研究所教授）―いずれも職名は当時―を迎えた。

本研究のもう一つの成果は、本研究代表者が 2016 年から Anthony Strugnell, Gianluigi Goggi とともに共同編集ディレクターを務めてきた Guillaume-Thomas Raynal, Histoire philosophique *et politique des établissemens et du commerce des Européens dans les deux Indes*, Fernay-Voltaire, Centre international de l'étude du 18e siècle 第 4 巻刊行(2023 年 1 月, 784 p.)による全 4 巻の批評校訂版刊行プロジェクトの完結である。本研究代表者は、この第 4 巻において、『両インド史』のなかでも最大の焦点となる、アメリカ合衆国独立を扱う第 18 篇（p. 249-429）の解題および批評校訂を担当した（ディドロの寄稿部分については Gianluigi Goggi の協力を得た）。『消え去る立法者』においては、ディドロの政治思想については、『百科全書』項目「自然法」と『両インド史』におけるイエズス会パラグアイ布教区叙述についての考察にとどめざるを得なかっただけに、本批評校訂版の完結は、本研究者にとって、フランス啓蒙における立法者論の結を補い、今後のディドロ政治思想研究の集大成に向けてのメルクマールとなる意義を持っている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 王寺賢太	４．巻 24
２．論文標題 人間学という分岐点――フーコーによるカント『実用的見地における人間学』解釈	５．発行年 2023年
３．雑誌名 日本カント研究	６．最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 王寺賢太	４．巻 第6期第2巻
２．論文標題 市田良彦の「フィクション」――あるいはアルチュセール／フーコー／市田	５．発行年 2023年
３．雑誌名 情況	６．最初と最後の頁 112-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kenta OHJI	４．巻 45
２．論文標題 Civilisation des sauvages et naissance des Etats-liberaux modernes	５．発行年 2025年
３．雑誌名 Lumieres	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 王寺賢太	４．巻 39
２．論文標題 川出良枝『平和の追求―18世紀フランスのコスモポリタニズム』書評	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本18世紀学会年報	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　6件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 王寺賢太
2．発表標題 フランス啓蒙から見た世界・〈われわれ〉・歴史
3．学会等名 連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」第三回、東京大学東アジア藝文書院（オンライン開催）（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 王寺賢太
2．発表標題 村山祐紀「機械・調和・瞬間―17世紀後半から18世期フランスにおける絵画言説史―」へのコメント
3．学会等名 日本フランス語フランス文学会ビデオセッション、上智大学主催（オンライン開催）
4．発表年 2021年

1．発表者名 王寺賢太
2．発表標題 「歴史とユートピア　『両インド史』のパラグアイ布教区叙述をめぐって」
3．学会等名 塚本昌則・鈴木雅雄主催「文学としての人文知」科研研究会第6回（オンライン開催）（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 王寺賢太
2．発表標題 『宣教と適応』評者への応答
3．学会等名 国立民族学博物館主催・齋藤晃編『宣教と適応』合評会（評者：横山和加子・吉田一彦・小俣ラポー日登美・安平弦司）
4．発表年 2022年

１．発表者名 Kenta OHJI
２．発表標題 Les Lettres persanes, ou les malheurs de la vertu selon Montesquieu
３．学会等名 Colloque "Les belles lettres dangereuses — Le destin de l'epistoralte litteraire (Institut de recherches en sciences humaines, Universite de Kyoto)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 王寺賢太
２．発表標題 人間学という分岐点―フーコーのカント『実用的見地からの人間学』解釈
３．学会等名 日本カント協会第47回大会「カント『人間学の世界』――開講250周年を記念して」
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kenta OHJI
２．発表標題 Civilisation des sauvages et naissance des Etats liberaux modernes — autour des missions jesuites du Paraguay d'apres l'Histoire des deux Indes
３．学会等名 Colloque "Sauvages des Lumieres" (Universite Paris I-Universite Cergy Pontoise（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 王寺賢太
２．発表標題 遡行と反復――モンテスキューとルソーの立法者論をめぐって
３．学会等名 慶応大学法学研究科「プロジェクト研究・政治思想研究」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 王寺賢太
２．発表標題 『消え去る立法者』評者への応答
３．学会等名 『消え去る立法者』合評会（評者：井上櫻子・川村文重・飯田賢穂・上野大樹・前川真行）、慶応大学文学部
４．発表年 2023年

１．発表者名 王寺賢太
２．発表標題 市田良彦の「フィクション」―あるいはアルチュセール／フーコー／市田
３．学会等名 フーコー研究フォーラム・シンポジウム主催、市田良彦『フーコーの〈哲学〉――真理の政治史へ』合評会でのコメント、京都大学時計台記念館（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 王寺賢太
２．発表標題 『消え去る立法者』評者への応答
３．学会等名 『消え去る立法者』合評会（評者：森川輝一・小泉義之・佐藤淳二）、京都大学人文科学研究所
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Guillaume-Thomas Raynal	４．発行年 2023年
２．出版社 Centre international de l'etude du 18e siecle	５．総ページ数 784
３．書名 Histoire philosophique et politique des etablissements et du commerce des Europeens dans les deux Indes	

１．著者名 王寺賢太	４．発行年 2023年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 532
３．書名 消え去る立法者ーフランス啓蒙における政治と歴史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Centre international de l'etude du 18e siecle
https://c18.net/18/a.php?nom=r_presentation
Raynal, Histoire des deux Indes
https://c18.net/18/a.php?nom=r_presentation

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関